

I.B.S～鉄血のストラト ス～

虹甘楽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄血のオルフェンズ×インフィニット・ストラトス（IS）のクロスオーバー小説、開幕。紛争の絶えない国、マルスで育った三日月・オーガスは戦いの中でうち捨てられたIS『バルバトス』と出会い、起動する。そして世界で初めての男性IS操縦者となった三日月はIS開発者、篠ノ之束と出会い、IS学園に送られた。これは、「本当の居場所」を手に入れた三日月の物語。

目次

第1話	決闘ですわ!	1
第2話	オレが勝った場合はどうなんの	
?		14
第3話	『1組の悪魔』、三日月・オーガス	27
第4話	こいつは、死んでいいやつだから	42

第1話 決闘ですわ！

10年くらい前、大きな事件があった。

ここより東の国——たしか、タバネは日本っていったつけ——に、世界中からミサイルが発射された。モビルワーカー M Wの砲撃よりも数も密度も破壊力も上の脅威に晒されたその国は大慌てになったけど、そのとき英雄が現れた。

ミサイルの前に立ち塞がったのは、二本の剣を携えた純白の機械人形。人より一回り大きいそれは、ほぼ同時に発射されたミサイルを信じられないほどの速さで追いかけてわして、切り裂いて、爆発に巻き込まれるより速く離れた。言葉にすれば単純なこの作業を、何百、何千回と繰り返し返した果てに、傷一つつけることなく日本を守り切った。

そんな未曾有の危機（だった、らしい。オレには、仕事のとときの危なさとは区別がつかないけど）を乗り越えた英雄に対して、世界は攻撃を仕掛けた。まあ、敵にそんなわけのわからない力を持った相手がいたら、排除しようとするのは当然だと思っけど、相手が悪かったと思う。なにせ200機を越える戦闘機や戦艦、人工衛星なんか束になっても敵わず、それどころか、まるで力の差を見せつけるかのように無力化され、一人も死人が出なかったんだから。

IS——インフィニット・ストラトスと、昔の兵器には、それだけの性能差がある。だからこそオレは、オレ達は、生きている。



「じゃあ、えっと、次は……三日月くん、三日月・オーガスくん」

「……ん、オレ？」

大人の怒鳴り声も、戦場の爆音も聞こえない部屋なんて珍しい場所にいたせいか、気が逸れてたみたいだ。名前を呼ばれて前を向くと、なぜか焦ったような、慌てたような様子の先生が、教卓の上に立っていた。

「あ、あの、ごめんなさい。今は自己紹介の時間で、三日月くんの番で、えっと、あの、邪魔しちやったのは悪かったけど、その、そんなに睨まないで、ね、ちゃんと自己紹介してくれるかな？」

別に、睨んでないけど。

「三日月・オーガス。マルス出身。趣味は……えっと、農業。よろしく」

それだけ言って、座る。

「ハーフっぽいとは思ってたけど……」

「日本出身じゃなかったんだ」

「マルスってどこだっけ？」

「確か、中国の下にある国よ」

「趣味が農業だつて。あんなに細いのに、意外かも」

「いいえ、よく見るといい身体してるわね……。ごくり」

「そりゃ筋肉もつくわよ。だつて農業つて、地面をならしたり水路を掘ったり、枕木を削つて線路を引いたり、色々な作業をするんでしょ？」

「そんなことするのは一部の農業系アイドルだけだよ……」

ちよつと話したただけけど、それで十分だったみたい。タバネの言うとおり、オレはただでさえ珍しい男性IS操縦者だから、名前だけ言うような間抜けなことをしなければまず失敗しないみたいだ。

それにしても、少しうるさいな。早く止めてよ、先生なんでしょ？

「えつと、あのー、し、静かに……」

「静かにしろ、馬鹿者ども。HR中だぞ」

音もなく教室に入ってきたスーツの女が、手に持ったクリップボードを叩いてパアン！と大きな音を立てると、波が引くみたいに騒ぎも収まっていく。こいつも先生なのか？と顔を見てみると……知ってる顔だ。

「諸君、私が1年1組の担任、織斑千冬だ。君たち新人を一年で使いものになる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことは——」

織斑千冬は、世界一のIS操縦者を決める大会、モンド・グロツソの初代王者で、二度目の大会でも不戦敗にさえなっていないければ優勝していただろうと言われている、世界最強のIS操縦者だ。そして、十年前のあの事件——ISっていう兵器が世の中に出るきっかけになった「白騎士事件」の当事者の一人で、オレと同じ「特別なIS」の操縦者でもある。

それが先生と生徒として会うんだから、妙な偶然、じゃないんだろうな。多分、タバネの仕込みだろう。

そろそろHRも終わりだ。授業、ついていけるかな。一応、この何ヶ月かで読み書きは練習したけど、まだ自信ないんだよな……。まあ、話自体はこの翻訳機があればちゃんと聞こえるし、なんとかかなるか。



なんとかならなかった。ISの授業って、難しいな。

「失礼、ちよつといいか?」

「ん、誰？」

「篠ノ之箒だ。私のことは、その……姉さんに聞いたと思うが」

ああ、そういうえば日本に、というか日常生活に不慣れなオレのために、妹になんか頼んでおくって言つてたつけ。

「そつか、よろしく、ホウキ。ええと、迷惑かけるかもしれないけど、悪いね」

「う、いきなり名前……。こちらこそ、大したことは出来んがよろしく頼む。ええと……」

「三日月でいいよ。みんなそう呼ぶし」

「そつか」

それにしても、ホウキもそうだけど、みんなけつこうデカいな。向こうにいたときは、女の子なんてアトラみたいにちっこいのばかりだったから、驚いた。ああ、でも、クーデリアはオレよりデカかったつけ。こういう平和？な国だと、みんなちゃんと食べれるんだらうな。オルガが言つてた本当の居場所つて、こういう所のことなのかな。

「なんでも、まだ読み書きが苦手だそうだな。私も成績がいい方とは言えんが、わからん所があつたら助けてやろう。ちょうど、寮でも同室だからな」

「へえ、そうなんだ。ありがと。ホウキ、いい奴だな」

鐘が鳴った。そろそろ、次の授業が始まるみたいだ。



「ちよつと、よろしくて?」

「アンタは?」

やっぱり理解不能だった二時間目のあとに話しかけてきたのは、ホウキとはまた違う、鮮やかな金色の髪を持った肌の白い女だった。

そういえば、あつちでは金髪なんて珍しかった。思い返してみても、2、3人しかいなかったはず。

「まあ!このわたくし、セシリア・オルコットを知らないと?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!」

「イギリス……?」

タブレットを取り出して、確認。だいぶ西の方にある国なんだな。聞いてはいたけど、本当にいろんな国から勉強しに来るんだな、このIS学園は。

「あ、あなたねえ……そこからですの!?!薄々が無さそうだとは思っていましたが、ここまでなんて!極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら」

「確かに、こつちに来てから驚くことは多いよ。タブレ^こい^うつて、向こうでは持つてな

かったし」

そう答えると、話しかけてきた女——セシリアは、こめかみを抑えて顔をしかめた。初めてMWに乗った後の年少組みみたいだ。頭が痛いのか？

「調子が悪いなら、休んだ方がいいんじゃない？」

「誰のせいだと……！……ゴホン、いけませんわ。わたくしは貴族。常に余裕を持って優雅たれと教わってきたではありませんか」

いきなり何か呟き始めた。なんか面白いな、こいつ。

「で、結局何の用なの？そろそろ鐘が鳴るよ」

「そうでしたわ……あなた、ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思いましたが、期待はずれでしたわね」

「学校って、知らないことを教えてもらうところじゃないの？その理屈だと、誰も入れないと思うんだけど」

「知らないにしても限度がある、と言っていますの！」

「ふうん。動かし方が分かってれば、難しいことはいんじゃない？」

難しいことを考えるのは、実際に整備するおやつさんやヤマギの仕事だし。

「まあ、持たざる者に施しをするのも高貴な者の務め。わたくしは優秀ですから、あなた

のような人間にも、まあ泣いて頼まれたら色々教えて差し上げてはよくつてよ」

「いいよ別に。間にあつてるし」

同じ教えてもらうにしても、こいつみたい人に人を対等だと思つてない奴より、ホウキの方がいい。

「あ、あなた、どこまでわたくしをバカに……」

「そういえば、入試つてあの、ISで戦うやつのこと?」

「マイペースすぎますわ!?……ええ、それが入試ですわよ。何か問題でも?」

「オレも倒したよ、山田先生」

「へ、ちよ、えええ!?!」

チャイムが鳴つた。休み時間、潰れたな。まあ他にやることもなかったんだけど。

まだ話し足りないなそんなセシリアだったけど、織斑先生が入ってきたのを見るとすぐに席に着いた。あいつ、結局何で話しかけて来たんだろう。

「それではこの時間は、実戦で使用する各種装備の特性について説明するが、その前にクラス代表者を決めないといけないな」

クラス代表者っていうのは、生徒会の開く会議や委員会への出席とか、みんなの意見を聞く場所に出る、クラスのリーダーらしい。参番組……じゃなかった、鉄華団というならオルガと同じ仕事つてことになる。その他に、もう一つ大事な役割つていうのが――

「再来週に行われる、クラス対抗戦にも出てもらう。ちなみに一度決まると一年間は変更できないからそのつもりで」

クラスごとの実力や成長を見るためにやるのが、クラス対抗戦。要は模擬戦だ。

「はいはい！私はオーガスくんを推薦します！」

「私もさんせ〜」

「右に同じ！」

「反対の反対なのです」

「では、候補者は三日月・オーガス……他にはいないか？」

「……オレ？」

自分で言うのもなんだけど、オレは難しい仕事には向いてないと思うんだけど。

「待って下さい！納得がいきませんわ！」

そう言つて立ち上がったのは、さっきまで騒いでいたセシリアだった。

「そんな無学な男がクラス代表なんて、恥さらしですわ！クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！物珍しさを理由に、極東の猿を推薦されても困りますわよ。大体、文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと自体、わたくしにとっては——」

「そうかな? いい国だよ、ここ」

小さい頃は、その日食べるものを手に入れるのも大変だった。初めて銃を撃ったあの日から、生きるためには何でもやった。

オルガと出会って、約束をして、夢ができた。CGSに入ってから食べるには困らなくなったけど、殴られたり蹴られたり、隣にいた奴がいなくなるのも日常の一部だった。

そして、あの日——オレが死にかけて、バルバトスと出会った日をきっかけに、すべてが変わった。オルガの言った通り、みんな食べ物も寝床も手に入れて、ちゃんと生きていけるようになった。オレも、何も不自由がない世界で、先のことを考えられるようになった。

こいつは、それに不満があるのか? 贅沢なやつだな。

「決闘ですわ! あなたとわたくし、どちらがクラス代表にふさわしいか、戦ってはつきりさせましょう!」

「いいよ。そっちの方がわかりやすい」

「わたくしの実力を示す、いい機会ですわ。言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「心配しなくても、手は抜かないよ。手加減って難しいから」

やることはいつもと変わらない。戦って、勝つ。オレたちは、いつもそうやって生きてきた。

「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜、第三アリーナで行う。オーガスとオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」



「大変なことになったな」

「そうかな？」

「そう、なのだ！相手は代表候補生だぞ？分かっているのか」

その日の放課後、オレはホウキに連れられて学園の剣道場に来ていた。

オレのIS、バルバトスの武装に刀があるって話したら、ならばどの程度使えるのか見てやろう、とか言われて、こうなった。

「この、木刀？っていうの、重くていいね。でも、当たったら怪我するんじゃない？」

「見くびるなよ三日月。こう見えて、私は有段者だ。素人の剣に敗れるほど弱くは無い」
「あつそ、じゃあ……」

両手で柄を握り締めて、大きく振りかぶる。そして試合開始の合図を待ったところ

で、なぜか対戦相手のホウキから静止が入った。

「待て待て!なんだ、その構え方は?」

「え、こうじゃないの?」

「お前、本当に素人なのだな。……待てよ、三日月。その構えから、どうするつもりだったのだ?」

「思いきり叩きつける」

「違うだろう!?!いいか、刀というのは叩くのではなく、斬ったり突いたり、そういう武器だ。そんな乱暴な扱い方をしているのは、すぐに折れてしまうぞ」

「へえ」

「だからだな、刀を十全に扱うためには、まず握り方、構え方から始めて振り方を学ぶ必要がある。となると、まずは素振りから始めた方がよいか……?」

「面倒くさいな。やっぱり、オレにはメイスの方が合ってる」

「まあ待て。正しい使い方を知っておいて損は無いぞ。身体運びは全ての武道に通ずるものだし、刀を持った相手と戦う上でも知識は武器となる」

「そっか、じゃあよろしく、ホウキ先生」

「せ、先生……!うむ、任せるがよい!」

なぜか上機嫌になったホウキに見てもらい、その後はひたすら木刀を振った。

最初のうちは腕が痛かったけど、身体の使い方がわかってきたら痛くなくなった。

IS学園。それは、戦い続けていたオレに与えられた、「本当の居場所」のひとつ。

これから先の日々に何が待っているのか。それは誰にも、きつとオルガにだってわからない。

第2話 オレが勝った場合はどうなの？

ホウキとの剣道練習を続けて一週間。気がついたら決闘の日になってた。

「いいか、三日月。こうして一週間訓練を続けてきたが……何故！木刀を叩きつける癖が治らんのだ！」

「だって、こっちの方が強いじゃん」

「んんっ……まあ、思わず言ってしまったが、なんというか、お前の戦闘スタイルは、既に定まっている様に感じた。だからこそ、太刀を使った戦い方よりも、間合いの測り方や見切りの技術を重視した」

「そうだな。今まで考えたこと無かったから、勉強になったよ」

「しかし、本当に良かったのか？ I S の知識や操縦方法とかは教えなくて。授業にもついていけるとは言えんだろう？」

「うん、大丈夫。始まったら、バルバトスが教えてくれるから」

初めてバルバトスを起動したときもそうだった。背中がかつと熱くなって、バルバトスの名前や動かし方が阿頼耶識を通じて直接流れ込んできたから、あの戦いでみんなを守れた。

「そうは言ってもだな……お前、ISを起動するのはこれが二度目なんだろう!」「そうだけど……問題ある?」

CGSの動力源として使われていたバルバトスは、起動した時点でダメージレベル換算でオーバードかいう、危ない状態だった。その後タバネが調整してくれたとはいえ完全回復には至らず、今日まで絶対安静、何があつても動かすなと言われてた。

……実は、入試のときに使っちゃったんだけど、まあ大丈夫でしょ。

「束は、今日まで動かすなと言ったのだろう?ならば、もう機体に問題はないはずだ。癩だがISに関して奴の右に出るものはいないからな」

「しかし、織斑先生……」

「まあ、動かせばわかるでしょ。来い、バルバトス」

起動するイメージを確かにするためにISの名前を呼び、待機形態の右手首に巻かれたブレスレットに触れる。どっちも授業でやった内容だけど、実際試してみると思ったよりしつくりくるな。

「……ぐっ!?!」

「どうした三日月?!鼻血が……」

「落ちつけ、篠ノ之。「こういうこと」があるかもしれないとは事前に聞いていたが。意識はあるか、オーガス」

「問題ないよ。ちよつと、いろいろ入ってきてびっくりしただけ」

初めてのときはそれどころじゃなかったし、痛みとか感じる余裕が無かったけど、この色んな情報が流れてくるような感覚は、少しきついな。まあ、そのうち慣れるでしょ。「それより、バルバトスをつけてるときのオレって、こうなってたんだ」

更衣室にあるより大きな鏡に映ったバルバトスの姿をじっくり見るのは、初めてだ。頭の周りに違和感があると思ったら、王冠の様な形の白い兜がついてるし、胸の周りには白と青の分厚い装甲がついてて、鎧みたいだ。動きを邪魔しないように腰の周りには装甲がなくて、膝から下にも分厚い装甲。足は人間と同じように平たくて、攻撃用のツメが二本飛び出てる。腕は左右非対称で、左腕にはあのとときMWの装甲から作ったガンレットが残ってた。防御するときはこつちで受けた方がよさそうだ。

「うむ……三日月の戦い方を聞いて想像していたのとは違う機体だな。もっと無骨な形状だと思ってたぞ」

「別に、普通でしょ」

「しかし、その腰回りだけを解放した準全身装甲のデザイン、どこかで見たような？」「くくつ、おしゃべりもいいが篠ノ之、オーガス。そろそろ時間ではないか？」

「そうだね。バルバトスも調子いいみたいだし、行ってくるよ」

あのとときよりも、動かしたいように動いてくれる気がする。タバネって、実はすご

かったんだな。

手足の調子を確かめながらアリーナの中に出ると、敵はすでに空中にいた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

「だって、逃げる必要ないし」

オレもバルバトスを空中に浮かせて、セシリアと向かい合う。

「まあ、強がりもそのくらいになさったら？最後のチャンスをあげますわ。今ここで、謝って、許しを請うのであれば、まあ受け入れてあげなくもなくてよ」

敵が攻撃準備に入ったって、バルバトスが言ってる。言われなくてもわかってるよ。この感じ、何週間か前までは毎日のように味わってたんだからさ。

「なあ、オレからも一ついいかな」

「あら、なんでしよう」

「オレが勝った場合はどうなんの？あんたそれ言ってなかっただろ。気に食わなかったんだ」

武装の中からメイスを選択。授業ではわからなかった方法が、こいつと繋がってる今ならわかる。コンマ以下の秒数で具現化した、バルバトスよりも長いメイスを両手で握り、いつものように大きく振りかぶる。

——次は、どうすればいい？

決まってる。立ち塞がるやつは、全員敵だ。

スラストを全力で吹かして、ライフルを手に棒立ちしてるISに躍りかかる。不意を打てたみたいで、ライフルの発射が少し遅れたみたいだけど、まあ関係無いか。銃口が見えてれば避けられる。やっぱ、ISってすごいな。

「この距離なら……」

「そうはいきませんわ!」

間合いに入っただと思ったら、敵の腰の周りに浮かんでたユニットからミサイルが二発、発射された。セシリアの顔には会心の笑み。どうも最初からこの流れを計算してたみたいだ。

でも、まあ。

「見えてるよ」

むき出しだった腰と左肩を狙った射撃を、身体を捻って回避する。ISのモーシヨンサポートやハイパーセンサーがあれば、攻撃の前兆を見てすぐに動けば間にあうみたいだ。

それだけじゃ終わらない。避けたときの動きを利用して、無防備なセシリアの腹めがけてメイスを振り切る。攻撃直後の油断を狙われたセシリアと、元々攻めるつもりで飛び込んだオレじゃ、勢いが違う。だから、先手は貰ったと思ったんだけど。

「きやつ！ライフルが」

「ふうん、これを防ぐんだ」

今の攻撃、セシリアに見えてるようには感じなかつただけだな。ISのオートガードってやつかな。本体への直撃は回避したけど、メイスを受け止めるみたいに持ち上げてたライフルはいただいたよ。

「なんて反応速度……それに、あの気持ちの悪い動き！どうやら、ただの田舎の猿ではないようですわね」

「くつちやべつてる余裕があんの？武器はもう壊れたし、あんたこそ降伏したら？」

「……御冗談を！『ブルー・ティアーズ』の真の力は、こんなものではなくってよー！」

セシリアが手をかざすと、背中に浮いていた四枚の羽根のようなユニットが本体から分離して、こつちに飛んできた。

——エネルギー反応。分離ユニットは砲台と推測。数、4基。

「へえ、面白い武器持つてるね」

「そう言っつていられるのも今の内ですわよ。お行きなさい、へブルー・ティアーズ！」

セシリアの動きに合わせて、四基の砲台が自由自在に空を舞う。重力やその他外力の影響を遮断するPICのお陰で、ISはこういう動きができるらしい。まあ、今のバルバトスにこういう非固定浮遊の装備はないから、オレには関係ないんだけど。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

「おっと」

敵が4体が増えたと思えばいいや、と考えてたけどそれは地上の、MW同士の戦いでの話。空中では頭上に足下と、普段は気にしないところから攻撃が飛んでくるから厄介だ。大体、今まで経験したIS戦はどっちも一撃で終わったし、オレも言うほど戦い慣れてないんだよね。

「曲芸みたいに……先程の回避といい、本当に猿のようですね！」

「そいつは、どうも！」

回避ついでに、待機状態にして隠してた滑空砲を具現化。トリガーが実体化した瞬間に引き金を引くと……ダメだ、脚部に命中。装甲が無い所を狙っただけだな。やっぱり、まだ慣れないや。

「射撃武器も持っていましたの!？」

「こういうのは隠してた方がいいって、ホウキが。でも駄目だね、オレはやっぱりこつちじゃないと」

滑空砲を収納し、またメイスを取り出す。ちよこまかと動く砲台は面倒だし、一基一基ぶちぶち潰すにも時間がかかる。なら、砲台の操作中、動きが鈍くなる本体を叩くの

が手つ取り早いよね。

確かに、連携して動く砲台は脅威だ。でも、バルバトスと繋がった今のオレは周りが全部見えてるし、発射前のエネルギーの高まりもわかる。阿頼耶識を通じて感じたそれらの感覚に従って身体を動かせば、たった四基の飽和攻撃くらい、簡単によけられる。

あとはセシリアの逃げ足と、オレの速さの勝負だ。

「かかりましたわねっ！」

……あれ、被弾した。背中にダメージ？バックバックのスラスターがやられた？

ああ、そうか。確かに阿頼耶識を使えば、まるで自分の身体みたいにバルバトスを動かせる。でも、自分の身体にない部分はどうしても意識してないから、紙一重で避けたつもりでも当たっちゃうんだ。失敗したな……。

ISの恩恵を受けてるのは、相手も同じ。スラスターをやられて、足を止めた機体を見すみす逃がすほどセシリアは甘くないはずだ。なんといつても、代表候補生なんだし。

着弾。シールドエネルギー減少。バリアー貫通により実体ダメージ：小。

でも大丈夫。オレも、バルバトスもまだ動く。このままじゃ、終わらない。

「そうだろ、バルバトス」

キューーン、とどこからか音が聞こえたのと同時に、バルバトスが粒子の光に包まれ

た。

さっきの爆発とは違う、あつたかい光。そして網膜投影された視界の上には、さっきまでは無かった文字列が浮かんでいた。

——フオーマットとフィッティングが終了しました。

そっか、これがお前の本当の姿なんだな。

「装甲が、増えた……まさか一次移行!?!あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?!それにその姿、データベースで見ただけのことがありますわ」

セシリアのやつ、そんなにうろたえてどうしたんだ?まさか、形が変わっただけで驚いてるわけじゃないだろうし、何かあつたのかな。



「千冬さん、あの機体ってまさか!?!」

「織斑先生だ、馬鹿者。そうだ、オーガスの専用機は、『ガンダムフレイム』だ」

「『ガンダムフレイム』……。姉さんが一番最初に開発した、72機の特別な第一世代機。

あの『白騎士』も含めてほとんどは破壊されたか、解体されて行方不明になったと言われているけれど、まさか現存していたなんて」

「どうも、ある国が運用中に重大なダメージを負ったようだな。コアの状態で輸送中に行方不明となっていたそうだ。それから6年。まったく、よく隠し通したものだ」



「その機体……『ガンダムバルバトス』ですわね。失われたガンダムフレームの一機にして、かの『白騎士』と同等の力を持つと言われる、伝説のIS」

「そうなの？バルバトスって、凄かったんだな」

「……まあ、あなたの無知は今に始まったものではありませんが、納得しましたわ。あなたの強さは、そのガンダムがあつてこそ。それに——」

隙あり。

「ちよつと!?まだ話の途中ですわよ!」

ああ見えて付き合いのいい昭弘ならともかく、そんな理屈はオレには通じないよ。敵との戦いなんだから、いつでも撃つていいのは当たり前じゃん。

「ガンダムとはいえ10年前の機体!旧式の機体では第三世代機であるこの『ブルー・ティアーズ』に勝てないということを、身を持って証明させてあげますわ」

「いいよ、そういうの」

また砲台を飛ばしてきたけど、その動きは単調そのもので——いや、違うな。頭の中がすーっとして、さっきまでよりよく見える。それに手や足、バルバトス自体が、オレが動きたい方に動いてくれる。なんか、今になってやっと、オレとコイツが一つになつたみたいな感じだ。

あの砲台はさっきから、オレの反応が遅い場所に必ず1基飛んできて、威力高めのビームを撃つてきてる。さっきまでは目で追えなくて逃げられてたけど、今のオレ達なら、逃がさない。

「へブルー・ティアーズ」の軌道を読みましたの!？」

「何度も見せられてれば、そりゃわかるよ」

制御が乱れた。太刀を具現化して空中に投げると、そこに飛び込んできた一基が串刺しになって、爆発。ハイパーセンサーがハウキの叫び声を拾った。これは、帰ったらお説教かな。長いんだよね、ハウキの話。

「これで、道ができた」

「も、戻りなさい へブルー・ティアーズ」!

「だから見えてるって」

宙返りすると、バックパックを掠めるようにビームが飛んできた。消えそうな光の軌跡をなぞるように飛んできた砲台に、滑空砲を発射。今度はちゃんと当たった。

「これで……」

「速……」

一瞬だけスラスターに過剰なエネルギーを送り込んで、爆発的に加速。右手にメイスを構えて、オレの動きに目が追いついてないセシリアに向けて、最速の突きを打ち込んだ。

斬るより突きのほうが速い。訓練が役に立ったよ。

「でもー」

セシリアはまだ抵抗した。腰に残してたミサイル砲台を、自分の近くで爆破。当然そんなことをしたら自分もダメージを負うはずだけど、MWと違って、ISはこのくらいじゃ行動不能にはならない。

爆風でオレを押し戻そうとしたのか。とっさにこんなことができなんて、自分でエリートって言うだけあるな。確かに、突進の勢いは落ちたし、軸もずれた。だからセシリアは苦しうさうさだけど、エネルギーが残ってるからまだ倒し切れてない。

まあ。

「逃がさないよ」

セシリアの腹に触れたメイスの先端から、先のとがった鉄塊が飛び出す。バルバトスのメイスはただ殴るだけの武器じゃなくて、中に杭が仕込まれてるんだ。だから突きと

「は相性がいい。あとでホウキにお礼を言っておこう。……ん、なんで頭を抱えてんの？
試合終了。勝者——三日月・オーガス」

セシリアは壁にぶつかっただ後、アリーナの地面に落ちて動かなくなった。まあ、IS
には絶対防御とか操縦者保護とか色々あるし、たぶん無事ですよ。

第3話 『1組の悪魔』、三日月・オーガス

「オーガスクンクラス代表決定おめでとう！」

「「おめでとう〜！」」

パン、パンと乾いた音が鳴る。オレにとつてはなじみ深いその音が、この平和な国では祝い事のために鳴らされるっていうんだから、世界は広いな。

あの決闘から一週間。保健室に常備されてるメディカルナノマシンのお陰でセシリアが完治したタイミングで、1組全員でパーティを開くことになった。ちなみに後で聞いた話だけど、ISの絶対防御も完璧じゃなくて、シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば生身の身体にダメージが貫通するんだって。もし殺してたら騒ぎになりそうだし、生きててよかった。

「はいはい、新聞部です。今話題の『1組の悪魔』、三日月・オーガスクんに特別インタビューをしてみました〜！」

「Oh……」

「副部长自ら……」

「オイオイ、死んだわあの先輩」

インタビューって何だ？それに、新聞？あんまり馴染みの無い言葉だな。

馴染みがないと言えば、今この女の子が言った『1組の悪魔』っていうのも聞き慣れないけど、もしかしてそれ、オレのこと？

「あ、私は二年生の黛薫子、よろしくね。じゃあ早速、クラス代表になった感想をどうぞ！」

「クラス代表って、いろいろやることがあつて、面倒くさいなあ。別に、オレはセシリアでもよかつただけけど」

「……ISを見ただけで悲鳴を上げるような状態で、勤まるわけがないだろう……」

「あれ、君は確か篠ノ之さんだね。IS生みの親である篠ノ之博士の妹で、オーガスくんと同室の！あとで取材させてもらつてもいいかな？ていうか今しちゃう！早速ですが、オーガスくんとの関係は？」

「ルームメイト兼、保護者……といったところか？決闘のときのように、こいつは放つておくと何をしでかすかわからんのだ」

「ホウキはいい奴だよ。勉強見てくれるし、武器の使い方とか教えてくれる。あ、そういうえばお礼をまだ言つてなかつたつけ。この間の戦いさ、お陰で突きがきれいに決まつたよ。ありがと」

「衝撃の事実！あの『悪魔の一撃』を生み出したのは篠ノ之博士の妹だった！……早速

いい記事が書ける気がしてきたわ、ありがとう！」

「ち、違うんだ！皆もそんな目で見るな！」

その後はみんなで写真を取って、運ばれてきた料理やお菓子を腹いっぱい食べて、オレが学園に来るきっかけになったときの話を聞かれたから答えようとしたら、なぜかホウキに必死で止められて。そしたらみんなが急に騒がしくなって……そんな穏やかな時間が、夜遅くまで続いた。

こういうの、久しぶりだな。ここに来る少し前、タバネがオレ達の後ろ盾になってくれたときに鉄華団のみんなで騒いだとき以来だ。

オルガ。オルガがくれた新しい居場所は、本当にいいところだよ。



「オーガスくん、おはよー。ねえ、転校生の噂、聞いた？」

「ううん、転校生がどうしたの？」

「それがねー、なんと中国の代表候補生なんだってー」

「……中国の？その話、詳しく聞かせてくれない？」

「おー。オーガスくんが乗ってくるのは珍しいねー。でも、そのこわーい顔をやめてく

れたら嬉しいなー」

次の日の朝、隣の席の女の子からこんな話を聞いて、タバネが言つてたことを思い出した。

『確かにそこのおいしそうな子の言うとおり、これで君たちが直接手出しされることはないだろうね。でも、おバカさんはどこにでもいるからねー。ほとぼりが冷めた頃を見計らつて、どうにかして接触しに来るはずだよ。例えばそうだねえ……学園に行くみーくんと仲良くなつて、そこから君たち、さらにその先の私に、つて言う風にね』

マルスと中国の間では国境紛争が続いてて、特にオレたちが住んでたクリュセでは激しい戦いが起こることが多かった。オレやオルガや、他の今の鉄華団の団員は、当時そこにあつた民間軍事会社CGS所属の兵士として、MWに乗つて働いてた。

そんな日がずっと続くかと思つてたある日、人権活動家として有名（もちろんオレは知らなかった）な女の子、クーデリアの護衛をオレたちが担当することになった。クーデリアはオレたちみたいにな少年兵の現実を知つて、痛みを分かち合いたいか言つてた。正直、初めて会つたときはあの無自覚な上から目線、あんまり面白くなかつたよ。

で、その夜、戦いが起こつた。いきなり中国軍のMW部隊がオレたちの基地に攻めてきて、真つ先に矢面に立たされたオレたち参番組はたくさん死んだ。オルガとビスケツトの機転で敵が減つたから、なんとか押し返すことができたんだけど、そのときにあい

つが現れたんだ。

緑色の全身装甲に身を包んだ、自由に空を飛ぶ人型の機械——ISが。

そいつは指揮を取っているのがオルガだつてすぐに気付いて、右手に持つてたライフルを向けた。それを見たオレは頭が真っ白になって、とにかく無我夢中で、射線に割り込みながら機銃を連射した。何発かは敵の銃口の中に吸い込まれていったけど、オレが覚えてたのはそこまで。気がついたらオレはMWから投げ出されて基地の中に倒れた。全身がひどく痛くて、視界はなんだか真っ赤だった。それでも、赤く染まった世界のなかで、光り輝いてた何かがおレを呼んでる気がしたから、かろうじて動く左手を伸ばした。

こうしてバルバトスと出会ったオレは、世界で初めてのIS操縦者になって、タバネと出会つて、今ここにいる。手に入れた居場所に不満はないけど、きつかけになつたあの戦いのことは、どうやってもいい思ひ出にはならない。やられっぱなしは嫌だからな。

「まー、難しいならそのまんまでもいいや。その転校生は2組に転入してすぐに、前のクラス代表からクラス代表の座を譲り受けて、今度のクラス対抗戦にも出てくるんだつてー」

「へえ……いいね、それ」

「代表候補生ってことは、当然専用機持ちよね？それじゃ、今年の1年生のクラス代表は、全員専用機持ちってことになるのかしら？」

「対抗戦が荒れそうね」

「でも4組の代表は、この間の決闘を見て怯えてたわよ。直接対決になれば間違いないくオーガスくん大勝利よ！」

「怖さでいったら、あの3組の子も相当よね。なんか、強くなることにしか興味が無さそうで、先輩にケンカを売ったとかいう噂もあるくらい」

「あつそ。で、2組の転校生は？」

「昨日の今日だからねー。情報なしだよ」

「——あら、早速あたしの話題で持ちきりみたいね」

盛り上がり水を差すように、初めて聞く声が割り込んできた。

声が出たドアの方を見てみると、そこにいたのは腕を組んで片膝を立ててドアに寄りかかっている女の子がいた。ついでに言うと、やっぱり見ない顔だ。じゃあ、こいつが噂の転校生？

「あたしが中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ。さて、噂のガンダムフレームの持ち主っていうのはアンタね」

「ファン・リンイン……そうか、おまえが……」

「話は聞いてるわ。あの機体、『ガンダムバルバトス』は、元々うちの国に割り当てられたコアよ。それを——ひっ!？」

すでに間近に迫ったファンの喉へと手を伸ばし、握りしめる。相手は、アトラとそう変わらない体重の女だ。だから、片腕でも十分持ちあげられる。

「あ、あんた……何の……」

こいつは中国の代表候補生で、専用機持ち。つまり、オレたちを襲って、仲間を大勢殺したやつらの一味だ。オルガが言ってたよ、いつか必ずこの落とし前をつけるって。対抗戦まで待つつもりだったけど、こいつはここで——。

「た、たす、け……」

「何をやっているか、三日月!」

ゴツン、と頭の後ろを殴られた。誰だよ、オレの邪魔をするのは。気にいらぬ。

「その目をやめろ、三日月!ここはI S学園だ、国同士の争いを持ちこむな!」

「ごめん、ホウキ」

「謝る相手が違うだろ、まったく……」

そういえばビスケットは、絶対に騒ぎを起ささないようにって言ってたよな。アトラからも、女の子には優しくしなきゃだめって。でも、こいつは敵だし……とりあえず、ホウキの言葉に従っておこう。

「なんか、ごめんな」

「げほっ……何が『ごめん』よ！あんた、頭おかしいんじゃない!？」

「二人とも、落ちつけ。周りの迷惑だ。……みんな？」

「そういえば、誰だか知らないけど止めてくれてありがとう。助かったわ。……げっ」

「お前は！」

あれ、この感じ。ホウキとファンって、もしかして知り合い？

「一昨日の偽幼なじみ！」

「一夏のところに行った泥棒猫！」

一夏ってたしか、織斑先生の弟で、ホウキの幼なじみだよな。そういえば先週末は久しぶりに会う約束をしてるとかで、妙に浮かれて出かけてたっけ。

なんか、オレそっちのけで盛り上がってるけど、そろそろやめた方がいいよ。織斑先生の足音が聞こえる。



「あ」

「むっ」

「げっ」

昼飯を食べに食堂に行ったら、朝会った中国の代表候補生、ファンとはち合わせた。

「……はあ、最悪。せつかく気分転換にいいもの食べにきたのに、あんた達に出くわすなんて」

「飯を食べる場所が食堂なんだから、こういうこともあるでしょ。嫌ならどっか行けば？」

「三日月の言うとおりだ。ほら、早く進め。後が詰まっているだろ」

でも、こういうときに限って空いてる席が少なくて、オレら3人はひとかたまりになつて座ることになった。睨みあうホウキとリンの間に挟まれて、なんだか居心地がわるいな。

「ねえ、あれオーガスくんじゃない？」

「何あれ、修羅場？」

「えーと、うん。ある意味修羅場……というか、修羅みたいだった」

「男の子の取り合いなんて、青春ね」

「あはは……中途半端に正解というか」

周りも騒がしいし、さっさと食べちゃおう。正直オレもこいつの隣で食事とか、嫌だし。

「で、あんたはなにマイペースに食べてんのよ!」

「蕎麦」

「そんなの見ればわかるわよ!」

うるさいなあ。メシがまずつくなるだろ。

「まったく、自分は関係ありません、みたいな顔しちやつて。……なんでこんなやつのためめに、あたしが……」

「それ、どういう意味?もしかして、朝言いかけてたことに関係あんの?」

「あ、ん、た、が!強制終了させたんでしようが!いきなり人の首締めてどういうつもりよ!」

「だってあんた、宣戦布告に来たし、オレの敵なんだろ」

「……はあ。『悪魔』とはよく言ったもんね。人間の常識が通じないわ」

朝の出来事だけじゃない。こいつの国は、オレたちの仲間をたくさん殺したんだ。その落とし前はつけさせないと。

「三日月、これ以上はやめておけ。常々言っているが、ここはIS学園だ。暴力では何も解決できんぞ」

「解決?何それ。オレはただ、やられっぱなしが嫌なだけだよ」

「自分がしたことを棚に上げて、何言ってるのよ?ISの強奪に、国境侵犯。おまけに女

の子に手を上げるなんて、これだからマルス人は」

「バルバトスを無くしたのはおまえらが間抜けだからだ、つてタバネが言つてたよ。それとも、こういうのつて、そつちの国に抗議した方がいいのかな？ オルガは、話はあるつて言つてたんだけど」

「何を言おうが、あんた達はテロリストと同じよ！ そんな相手に妥協点を探すなんて、するわけないじゃない」

「うるさいなあ。オレも面倒臭くなつてきた。いい加減——」

背中がかつと熱くなつて、オレの周りにユラユラと揺れる影が現れる。バルバトスもこいつを叩き潰したがつてるんだ。何度も授業を受けたから、1秒もせずに展開できる。そして一撃叩き込んで静かにさせてやれば——

「あらあら。なんだか騒がしいとは思いましたが、お猿さん同士の縄張り争いでしたか」
「……邪魔しないでくれる？」

「何よいきなり偉そうに！ あんた、何様よ」

臨戦態勢だったオレ達の間を割つて入つたのは、保健室で休んでたはずのセシリアだった。なんか調子悪いつて聞いてたけど、元氣そうだな。

「あら、ご存じないんですの？ この私、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットを？」
「そういえば、聞いたことがあるわね。代表候補生のくせに、決闘でポコポコにされて引

きこもってるイギリス人がいるってね」

「まあ、それで挑発のつもりですか？ 弱い犬ほどよく吠える、というのは日本のことわざでしたっけ」

……なんか、やりあう気分じゃなくなってきたな。

「あなたも代表候補生、そしてクラス代表というのでしたら、こんなところで周りの生徒を怯えさせるような真似は慎むべきですわよ」

「それは……そうだけども、こいつが悪いんじゃない！」

「見苦しい言い訳など不要ですわ。あなたも三日月もクラス代表なのでしょう？ ここはI S学園。国同士のいさかいを持ちこむ場ではありません。学生なら学生らしく、クラス対抗戦で決着をつけられては？」

「上等よ！ あんたなんか、コテンパンにしてやるから……って、何のんきに食べてんのよ！」

またあいつが騒ぎだしたけど、無視だ。昼休みは限られてるし、食事くらいゆつたり食べたい。



「三日月さん、篠ノ之さん、少しよろしくて？」

「ん、セシリア、何か用？」

「こら三日月。オルコット、昼は助かった。感謝するぞ」

「気になさる必要はなくてよ。あんな騒ぎを放っておいたら、わたくしの沽券にかかわりますもの」

5時間目から授業に復帰したセシリアは、放課後になつたらオレと箒に話しかけた。た。

「いきさつはわたくしも聞きましたわ。三日月さんの故郷、マルスは中国との国境紛争が続いている国ですわね。その代表候補生である鳳さんと反目するのは仕方がないことだと思えますわ」

「そこは同意するが……暴力はいかんぞ、三日月。武士道に反する」

「直接やりあうのとI Sで勝負するのって、そんなに違うかな？オレは、同じことだと思うんだけど」

そもそも、ファンは敵だし。タバネも「潰せ」って言つてた。

あれ、「ガツンとやっちゃえ」だっけ？まあ、意味はそんなに変わらないからいつか。「違いますわ。I S戦はあくまでスポーツの一種。殺し合いではなく、互いを高め合う競技です。私怨を持ちこむな、とは言えませんが、そのことは心に留めておいてくださ

「いませ」

「えーっと、どういうこと？」

「場外乱闘をするな、と覚えておけばいい」

「決着はクラス対抗戦でつけるってことになったし、それまでに仕掛けるのはダメなのか。わかった。」

「わたくしの友人も紛争に巻き込まれて、今も現地に取り残されています。ですから、三日月さんの気持ちは——」

「それってもしかして、クーデリアのこと？」

「クーデリアをご存じでしたの!? 彼女は無事ですか？」

「ここに来る前、最後の仕事がクーデリアの護衛だったんだ。戦闘が起こったけど、クーデリアは巻き込まれてないよ。今は国連本部？つてとこに向かっているとと思うよ」

「そうですか、良かった……本当に……」

「お嬢様同士繋がりがあるのかと思って聞いたけど、本当に知り合いだったのは驚いたな。」

「クーデリアは戦いとは無縁の、平和な場所で育ったって聞いたけど、あの全身装甲のISが出て来たときは、自分がバルバトスを装着して戦うって言ったんだ。ISは女にしか扱えないからって。」

それまでは上から目線で世間知らずなお嬢様だと思ってたけど、凄い奴だなんて思った。

そんなクーデリアの友達だつていうセシリアも、実はちゃんとしたやつかもね。

「どうやら、恩を返さねばなりませんわね。三日月さん、クラス対抗戦に向けて、このセシリア・オルコットがコーチして差し上げますわ」

「オ、オルコット。気持ちはありがたいのだが、お前は確かISにトラウマが残っているのでは？」

「じゃあ頼むよ。オレもそろそろ、空飛んでる相手との戦いに慣れておきたいし。素振りにも飽きてきたし」

「聞き捨てならんぞ三日月！」

こうして、オレは二人から教えを受けながら、クラス対抗戦の日を迎えることになった。

第4話 こいつは、死んでいいやつだから

ファンと会った次の日、クラス対抗戦の組み合わせが発表された。オレとファンの直接対決は最初の試合。それが決まってからはずっと、ホウキやセシリアとI Sの訓練を続けてた。

近距離での立ち回りや格闘はホウキ、中・遠距離での戦いはセシリアに教わったけど、正直ピンとこないな。ホウキは隙があれば刀を振らせようとするし、セシリアは理屈ばかりで、阿頼耶識の感覚に合わせて撃ってるオレとは何か違う気がする。それでも、射撃のタイミングとかは参考になったけどさ。

そういえば、バルバトスの装備がいつのまにか増えてた。右腕に、まるでブルー・ティーズの砲台みたいな武器がくっついてて、ミサイルが撃てるようになってた。分離して飛ばすこともできるみたいだけど、オレには無理みたいだ。イメージ・インターフェースってというのが関わってるらしいけど、身体の一部を飛ばす感覚なんて分からないからかな。

「まるで〈ブルー・ティーズ〉のような装備ですわね。倒した相手の装備を真似ているのですか？」

「単一仕様能力なのか？しかし、あれは第二形態以降でなければ発現しないはず」「ガンダムフレームには謎が多いですわね……」

「関係ないよ。あるものを使う、それだけだから」

滑腔砲だけじゃ不便だったし、丁度よかった。刀を投げたら、またホウキに怒られるし。

「ともかく、特訓は今日までだ。明日は出せる力をすべて使い、あの中華娘をやっつけてやれ！」

「箒さん、焚きつけないでくださいませ！三日月さん、これは試合なのですから、くれぐれもやり過ぎないようにお願いしますわ」

「手加減って、難しいんだよな」

前にクーデリアが襲われたあの戦闘の話をしてから、セシリアはずっとこの調子だ。そもそも襲撃の犯人が中国とは限らないから、今国連がやってる調査の結果が出るまで必要以上にファンと喧嘩しないように。それから事件の真相を知らないファンを恨んでも仕方がないって。

代表候補生なんて言っても、まだ15歳の子供で、国の中枢に意見を言えるような、幹部みたいに偉くはないらしい。じゃあセシリアもそんなにエリートってわけじゃないんだな、って言ったたら落ち込んだ。

ところで、15歳だったらオレの周りだともうみんな戦ってたり、働いてただけで、こういうところで常識の違いを感じるな。



そして、試合当日。満員になったアリーナの中で、オレとファンは向かい合ってた。

『バルバトス』を纏ったオレの視界、網膜投影された世界が、相手のISが『甲龍』っていう名前だと教えてくれる。ほかに見た目から分かることは、棘付きの装甲とか尖った爪とか、バルバトスと似た近距離パワー型っぽい。バルバトスが元々中国にあっただっていうのは事実らしいし、見た目が似てる気がするはそのせいかな。

「さて、三日月・オーガス。今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げたあげるわよ」

「前、同じようなことを言ったやつがいたよ。あんたも口だけなのかな」

「二応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破——」

「もういいよ喋んなくて。ホウキが言ってたんだ。あんたをやっちゃまえてさ——」

言ってるじゃない！とどこかから聞こえた気がしたけど、それは試合開始のアナウンスにか

き消された。

両手で構えたメイスを振りかぶり、推力全開で飛びかかっっていく。相手も考えてたことは同じみたいで、刃を二本連結させた、巨大な青竜刀を手に突撃をかけてた。

獲物同士がぶつかって、火花を散らす。拮抗は一瞬、吹き飛んだのは甲龍の方だ。

「甲龍が力負けした？ 第一世代機に？」

詳しくは知らないけど、ガンダムフレームにはISコアとは別にリアクターが搭載されていて、その二つを同期させることで高い出力を出せるんだって。この技術は、まだどの国家でも再現できてないらしいよ。だから、こうなることは分かっていた。

「一気に仕留めるー」

「させないってのー！」

姿勢を崩した甲龍目掛けてメイスを構える。パイルバンカーに一撃必殺の攻撃力があることは、セシリアが保証してくれた。見たところ相手に射撃武器はない。なら、これで終わる。終わらせる。

そう思った矢先、甲龍の肩の装甲が開いて、中に収められた球体が光る。

それを目視すると同時に、オレとバルバトスは吹き飛ばされていた。

(何をされた!?)

(バリアー貫通、ダメージ86。不自然な空間の歪みを検知)

直感に従って体をひねると、左足を何かが掠めた感覚があった。

「見えない攻撃……?」

「侮ったわね、あたしを!」

バルバトスが検出する「空間の歪み」ってやつを頼りに、絶え間なく機体を動かす。でも、完全には躲しきれない。装甲が少しずつ凹み、削れて、ダメージが蓄積していく。空気を固めて、撃ってるのか? 射撃武器が無いと思ってたけど、とんだ隠し球があったもんだ。

「よくかわすじゃない。でも、いつまで保つかしら?」

「チツ!」

距離を保ってちまちま削ってくると思えば、青竜刀を力任せに振るう。受けに回ってメイスを構えれば、至近距離で撃たれて肩の装甲を吹き飛ばされた。

こっちもお返しに、右腕に付いた砲台からミサイルを撃ち出す。これには不意をうたれたのか、左腕の装甲を失った甲龍は飛びのいて、また距離が開いた。

「やってくれるじゃない!」

ファンがオレを睨んで、また見えない攻撃を放つ。スラスターを噴射して避けて、肘のあたりを何かが掠める。……うん、段々わかってきた。

「オレを痛めつけるんじゃないやなかつたの?」

挑発してみたなら、砲撃が激しくなった。連射は速くなったけど、狙いが荒い。

さつきから感じてるヘンな感覚に従って体を動かして、滑空砲を放つ。弾は外れたけど砲撃が止んだから、メイスを振り上げて一気に接近。受けて立つとばかりに構えられた青竜刀とぶつかる寸前でメイスを収納。ガードをすり抜けて蹴りを叩きこんだ。そのまま甲龍を蹴り飛ばして、反動で飛び上がり、反撃の砲撃を回避した。

「何で!? 何で当たらないのよ!」

「何度も見てれば、そりゃ慣れるよ」

見えない攻撃は奇襲には向いてるけど、来るとわかってるなら避けるのは難しくない。

「んじゃ、そろそろー」

攻撃は見切った。だから勝負をつけようとしたまさにそのとき。

突然、大きな衝撃がアリーナ全体に走った。



「オーガスくん、風さん、今すぐアリーナから脱出してください!」

ピットにて試合をモニターしていた山田真耶は、突然の乱入者の出現に大いに慌てて

いた。ヘッドセットに向けて大声を上げるその姿は、普段のおっとりとした彼女とは似ても似つかない。

「何だあの機体は。見たことのないIS、それも全身装甲機か」

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！あの見るからに重装甲の機体……実弾メインのお二人では相性が悪くってよ！」

上空から現れてアリーナのシールドを破った乱入者は、深緑の装甲に身を包んだ、奇妙な機体だった。

現代のすらりとしたISからはかけ離れた、丸みを帯びたシルエット。まるで球体のようにも見える短い手足。その両手に握られているのは、何かの冗談のように巨大なハンマーだ。あれを叩きつけ、純粋な物理的破壊力のみでシールドを破ったとでもいうのだろうか？

甲龍以上にわかりやすい、明らかなパワー型。そんな特徴的な機体は、しかしこの場にいる誰もが知らない機体であった。

「山田くん、連絡はもういい。それより、不明ISの特定は済んだか？」

「ダメです！データベースに該当ありません。でも……」

「ディスプレイに目を通してながら、彼女は呟く。

「この独特の周波数……バルバトスに近い、ような……」

そう聞いたとき、織斑千冬は先程までとは違う、異様に鋭い視線をしていた。



「何？あれ」

「知らないわよ、そんなの」

突然降ってきた新しのIS。どうやら、ファンにも心当たりがないらしい。

「とりあえず、試合は中止よ。あんたはピットに戻りなさい」

「あんたはどうすんの」

「あたしは代表候補生。いくら敵同士とはいえ、一般人のあんたを守る義務があるわ」

「へえ……」

メイスを肩にかついで、甲龍の隣に立つ。

「ちよつと、早く逃げなさいよ！」

「逃してくれるならね。それに……」

敵性ISの出力増大。ベレー帽のような頭部の隙間から覗くツインアイが怪しく

光った。

「あんたの命令を聞く理由はないよ」

人型、というよりはまるでカエル型の機体が、重そうな見た目や短い足からは想像できない俊敏な動きで迫って来る。PICがあるから、そういうのは関係ないんだろな。

メイスを振り下ろした。押し負けた。見た目通りの質量を持った機体は、それ自体が凶器だ。追撃を受ける前に、自分から飛びのいて距離をとる。

「オーガス！」

「いいから」

オレを庇うように飛び込んできたファンは、青竜刀を不明機に叩きつける。

が、不明機はスラスターを吹かしてバックステップ。紙一重で切っ先を避けると、力任せにハンマーを振り回した。

「きゃあつーこのつー」

咄嗟の判断か、敵の間合いにさらに踏み込むことで威力を減らしたファンだったけど、敵のパワーはそれ以上。腕の力だけで甲龍を吹き飛ばした。

甲龍も反撃である見えない攻撃を放ったようだけど、直撃を受けたはずの敵機には傷一つない。バルバトスよりも丈夫なんだな。

でも、今の攻撃のお陰で、あいつに隙ができた。滑空砲では効果がないだろうから、狙うのは一撃必殺の威力を持つパイルバンカー。

突きの構えでメイスを持ち、突撃。敵と目が合ったけど、もう遅い。既にメイスの先端は、奴の胸部を捉えている。

パイルバンカーが放たれた瞬間、信じられないことが起こった。敵の機体が、まるでオレと同じように体を捻ったと思ったら、右腕に強烈な痛みを感じたんだ。

わずかに逸れた突きは、丸みを帯びた装甲に流されて、杭は装甲を抉り取るに留まった。錐揉みして吹き飛ぶオレの視界の隅で、砕け散った白い装甲と、噴射光を放つハンマーが見えた。

あの動き、阿頼耶識？いや違う、武器にスラスターが内蔵されてたんだ。だからあんな無理な姿勢変更ができたし、高威力の打撃が放てる。厄介だな。

◆ 「ミカくんは確かに強い。でも、いつまでも力任せじゃ勝てないよ？この、ガンダムグシオンには」

「あんた、大丈夫!？」

「そっちこそ」

右腕が潰されて、腕部のロケット砲も壊れた。でもシールドエネルギーはまだ残ってるし、戦闘続行に問題はない。

ファンはオレが壊した左腕以外に目立った傷はないけど、いや、よく見たら青竜刀にヒビが入ってる。これじゃ、次の攻撃には耐えられないだろうな。

「それならいいわ。それより見た?あの動き」

「うん。なんていうか、人間離れしてた」

「あんたの動きも大概だったけど、あいつはそれ以上よ。まるでー」

「人間じゃないみたいだね。もしかして、無人機?」

「あり得ないわ。ISは操縦者がいなくては動かない。それは絶対のルールよ!」

「そっか。まあでも、やることは変わらないかな。あいつを潰すよ」

パイルバンカーは一発きりだから、もう使えない。太刀だと破壊力が足りない。メイスで動かなくなるまで叩くしかないか。

「悔しいけど、あたしの武器じゃ効果がない!牽制に徹するから、トドメは任せるわよ!」

ファンが飛び出して、見えない砲撃をドカドカ放つ。威力で見れば通用はしないけ

ど、土煙を上げたり妨害には使えそうだ。加えてファン自身もチョロチョロ飛び回るから、振り回してるハンマーも当たらない。その状況に焦れたのか、敵は巨大なハンマーを収納し、右手に肉切り包丁のような分厚い刃を、左手には短銃身のマシンガンを展開した。

チャンスだ。

「行くよ」

「オツケーー！」

みたび三度メイスを振りかざし、呐喊。ファンが飛びのいた空間に身を滑り込ませたけど、直感的に何か嫌な感じがしたから、飛び跳ねた。直後に、足の下から聞こえたのは爆裂音。ハイパーセンサーが、敵の胸部装甲から放たれた砲弾を捉えた。

「そういうのもあるんだ」

落下の勢いも乗せてメイスを叩きつける。頭部装甲が凹み、何かに誘爆したのか小規模な爆発が起こった。

さらにもう一撃、と思っただけど、そう上手くはいかなかった。力任せのスラスタ→移動で逃げた敵はマシンガンの弾をばら撒き、オレの接近を阻む。

……こんなとき、もう少し小回りの効く武器があればな。小振りのメイスとか。

まあ、無い物はしょうがないよね。後でおやつさんに頼んでみるとして、問題は今だ。

この感じだと、あと二、三発殴ったところで有効打にはならない気がする。

さて、どうする？

「三日月！」

不意に、アリーナ内にホウキの音が響いた。どこから？——中継室だつて？

「刀を使え！いくら装甲が良かろうが、関節は脆い！」

「この声——あの剣道女？」

フアンもホウキに気付いた。同時に、敵の I S も。

敵は突然響いた声に興味を引かれたのか、周りを見回して音声の発信源を探す。

そして無造作にマシンガンを向け、引き金を引いた。空葉莢が奏でる乾いた音とリズ

ムが、耳朶に焼きつく。

「ホウキ？」

中継室から爆炎が上がる。

……今、何があつた？

コイツは今、何をした？

「何、やってんだよ、お前」

突撃。肉切り包丁をガントレットで受け止めつつ、殴りつける。敵の左手がマシンガ

ンごとひしゃげ、残弾が誘爆して爆発が起こつた。

「お前が……!」

シヨルダーチャージをスウエーで避け、腹を蹴って距離を取る。敵はまたハンマーを展開した。

いいよ、付き合ってやる。殴り合いなら得意分野だ。

「——落ち着け、三日月! 私は無事だ」

「間一髪、つてヤツね」

ホウキの声が聞こえると同時、爆煙が晴れた。そこにいたのは、肩アーマーが吹き飛び、青竜刀も折れ、満身創痕のIS、甲龍。そっか、ファンが間に合ってたのか。

……良かった。これで安心して。

こいつを、殺せる。

敵がハンマーを振りかぶる。オレを頭から潰すように放たれたそれを、逆に真上からメイスで串刺しにした。

次は、至近距離から発砲。これはさつきと同じパターンだ。距離を詰めると撃つてくる、まるで機械のような正確さ。

飛び上がりつつ、太刀を具現化。刃を下に構え、頭と胴体の継ぎ目を狙う。

こいつが有人機なのか無人機なのか、それはどうでもいい。こいつはホウキを殺そうとした。オレ達を殺そうとした。だから、こいつは——

「こいつは、死んでいいやつだから」

白い光を帯びた太刀を、装甲の隙間に刺し入れる。特に抵抗もなく進んだ刃は首から胸、腹まで進み、敵の股下から先端を覗かせた。

一拍遅れて吹き上がる赤茶けた液体は、人間の体を流れる血液ではなく、機械を巡るオイル。そっか、本当に無人機だったんだ。みんなの前で人を殺すのはなんか嫌だったし、機械でよかった。

もはや輪郭を保てず、無数の光の粒となって消える敵機を見ながら、オレはなぜかそんなことを考えてた。